

式 辞

吹く風には、まだ冷たさが残るというものの、運ばれてくる光には、春に開けゆく明るさがあります。風の向こうに花を見る今日この日に、ご来賓の皆さま、多数の保護者の皆様のご列席をいただく中で、大阪府立春日丘高等学校第69回卒業式を、ここに開くことができましたことは、この上ない喜びでございます。高い所からではございますが、厚く御礼を申し上げます。

とりわけ、保護者の皆様方におかれましては、たくさん喜びと、それに劣らないくらいのご苦労が、あったことと思われそうですが、晴れやかなお子様のいまの姿をご覧になって、やっどこまで来たのだという感慨は、一入でありましょう。心よりお祝いを申し上げますとともに、ここまで本校を支えていただきましたことに、感謝を申し上げます。ありがとうございます。

さて、卒業生の皆さん、改めまして、卒業おめでとうございます。3年前、私は皆さんと一緒に、この春日丘高等学校に着任しました。そして、私もいよいよ、大阪府立高等学校の教員を卒業いたします。皆さん方をはじめとする、たくさんの方々に支えられて、今の私があります。そしてさわやかな春高生のおかげで、とても幸せな卒業を迎えることができます。ありがとうございます。

3年前の入学式の時に、私は宮沢賢治を紹介して、「彼の作品を貫くキーワードの一つは、「ほんとうのなにか」です。皆さんは、春日丘高校の3年間で、「自主・自律そして自由」という言葉の大切さをしっかりとかみしめて、皆さんにとっての「ほんとうのなにか」を、追求してってください。」と話をしました。皆さん一人ひとりにとっての「ほんとうのなにか」が見つかったでしょうか。今日は、この宮沢賢治の言葉を引きながら話をしたいと思います。

彼が一番に求めた「ほんとうのなにか」は、「ほんとうのしあわせで」です。「僕はもうあんな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く」。あるいは、「何がしあわせかわからないです。本当にどんな辛いことでも、それが正しい道を進む中の出来事なら、峠の上りも下りもみんな、ほんとうの幸せに近づく一あしづつですから。」と言っています。賢治にとって、「ほんとうのしあわせ」は、求め続ける思いやその力、すなわち求め続けることそのものにあつたのです。

たとえその「しあわせ」が何ものなのか、どこにあるのか分からなくても、それを追求するという、その心に「しあわせ」があるのです。皆さんにとっての「ほんとうのなにか」、まだ見つからない人も、きっと多いでしょう。これからの長い人生、それを追求し続けていくことになるかもしれませんし、たぶんそうなるだろうと思います。でも、それでこそ、そうやって、いつまでも求め続けてこそ、「ほんとうの」生き方になるのです。

その求め続ける強い気持ち、それを彼は「切符」という言葉で表現しました。「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前は、本当の世界の火やはげしい波の中を、大股にまっすぐあ

るいて行かなければいけない」。あるいは別の所では、「僕たちと一緒にいこう。僕たちはどこまでだって行ける切符を持っているんだ」ともあります。

皆さんの手元には切符はあるでしょうか。私が教師になったとき、たぶん私の手元に切符はなかったと思います。30年以上仕事を続けて、いろんな苦しいこと、そしてうれしいことを経験する中で、最近になってようやく切符が見えてきたように思います。でも、たとえ府立高校の教師を退職しても、その切符を改札口で渡すことには、まだなりません。まだまだ握り続けるつもりです。それを手の中に持っている限り、私は幸せを感じられます。

世阿弥という人については、授業で習ったでしょう。能楽の芸を磨くことについて、彼は、いくつになっても、その時その時の未熟さを自覚して、常に上をめざして精進する必要性を説きました。その未熟さを自覚することを「初心」として、「初心忘るべからず」と言ったのです。その常に上をめざしていく姿、それが美しく、人を引き付けます。

確かに、皆さん方のように若いときには、その若さゆえに魅力があります。でもそれは一時的なもので、それを「時分の花」として戒めました。その「時分の花」に、人が集まってもはやされても、やがて花がしおれたら、人は離れていってしまいます。今に満足せず、常に前を向いていく。その姿に集まる人こそが、自分を支え続けてくれます。そんな人たちに囲まれていること。それが何よりの幸せだと私は思います。「住する所なきを、まず花と知るべし」。常に何かを求め続けること、それが「花」なのです。

宮沢賢治は、ずっと「ほんとうのなにか」を求め続けました。とうとう体を壊してしまいますが、どんなに体がつらい時でも、村の人が相談に尋ねてきたときには、きちんと起きだして正座をして、まっすぐにその人を見て話を聞いたそうです。人のためになりたい、自分のことはその次でよい。そんな気持ちの表れです。

「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」。私の心に常にある彼の言葉です。こんなことは、とてもできないことでしょう。でも、こんな気持ちを持ち続けて、そして自分の幸せを求め続ける、そんな人があふれたら、世の中には、争いのない平和がやってくるでしょう。

自分だけが満足すればよいといった風潮が、どんどんあふれてきている今の時代です。グローバル社会とって、国境を越えたつながりが求められるようになって、逆に国境が意識されたりもしています。どうか皆さん方は、そんな自分だけはといった、にせものしあわせを求めるのではなく、「ほんとうのなにか」、「ほんとうのしあわせ」を求め続けていってほしいと思います。

そんな願いをずっと求め続けてきた春高で、3年間を過ごした皆さんなら、きっとできるでしょう。明るい将来を皆さんの力に託したいと思います。

以上で私の式辞といたします。

平成29年2月28日

大阪府立春日丘高等学校
校長 湯峯 裕